



同好会ひろば

第286号
R3. 5. 27
No.1

社会の変化に適応した同好会活動を目指して

～「共に語り合う場」と「仲間の輪を広げるための工夫」を通して～

「新しい生活様式」という言葉に代表されるように、私たちの社会は新型コロナウイルス感染症の感染拡大を機に大きく変化しました。「人と人との接触を8割減らす」「3密を回避するため、たくさんの人が集まる会合は行わない」「テレワークの推進」など、手洗いや換気などの衛生面だけでなく、行動面でも大きな変化が求められています。

このことは、学校現場でも同様です。例えば『GIGA スクール構想』による1人1台タブレット端末機器の導入は従来の計画よりも前倒しで実施され、授業だけでなく、学校の在り方自体が大きく変化しようとしているのです。

昨年度、若手会員の意欲的な実践の中には、オンライン会議システムを活用して、他県の方と意見交換をする授業がありました。また、『バーチャルスーパーマーケット見学』を子どもができるようにした革新的な実践も見られました。

このように、子どもの豊かな学びのために、教育の本質をしっかりと見据えながら、不易と流行という両面をしっかりと見極め、社会の変化に適応しようとする姿勢こそが、今私たち社会科教員に求められていると考えます。

「社会の変化に適応した同好会活動」を実現するために、今年度の同好会活動では、「共に語り合う場の工夫」と「仲間の輪を広げる工夫」を大切にしたいと考えます。

新型コロナウイルス感染症対策のため、今年度も様々な会合に制限がかかる可能性があります。しかしながら、若手会員や中堅会員、ベテラン会員が世代を超えて共に学び、語り合うことは、社会科教育や指導方法などに対する見識を深めたり、新たなアイデアを生み出したりできるので、社会科の授業力向上には必要不可欠であると考えます。そこで、オンライン会議システムを有効に活用しながら、感染状況を見極め、昨年度は行うことができなかった語り合う場を定期的に設定できるようにします。

詳細は、先日送付いたしました「活動計画基本案」に記してあります。

ご一読いただき、今年度の同好会活動にご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

【第286号 紙面】

社会の変化に適応した同好会活動を目指して	(p 1)
「研究活動」「研修活動」	(p 2)
4月全体会	(p 3)
子ども輝く社会科授業、今後の予定	(p 4)

研究活動

今年度は、来年度の全中社研名古屋大会を見据え、現代社会が抱える今日的な課題に対して、社会の一員としての自覚をもったり、今後の社会の在り方に関心を持ち、その形成に携わろうとしたりする子どもの姿を目指して、研究活動に取り組んでいきたいと考えています。また、小学校部会においては、今年度も中学校との連携を図るために、学年ではなく分野ごとに推進部会を設けます。

～小学校部会～

分野	地理分野	歴史分野	現代社会分野
部長	児玉良太(戸笠小)	内藤智裕(宮根小)	相澤 慶(旭出小)
副部長	早川雅人(苗代小)	下村芳敬(藤が丘小)	山口喬史(如意小)
推進部員	永瀬智仁(天子田小)	浅井義人(野田小)	坂野寛明(栄小)
	室田禎貴(井戸田小)	伊藤 淳(小碓小)	野田裕磨(太子小)
	勝田洋光(北一社小)	田中隆晃(笠東小)	松岡知幸(自由ヶ丘小)
担当事務局員	石垣成一(陽明小)	三上 信(浦里小)	川瀬祐介(小幡小)
	下村康大(松栄小)	岡田健吾(楠小)	八神輝久(広見小)

～中学校部会～

分野	地理的分野	歴史的分野	公民的分野
部長	久々野将広(志段味中)	立野淳一(南陽東中)	加藤大知(南陽中)
次長	早川若仁(伊勢山中)	布藤 勇(久方中)	森本敬憲(一色中)
推進部員	倉園友輔(富士中)	矢吹 隆(沢上中)	瀨瀨直樹(城山中)
	山本亮介(富士中)	加藤優太(沢上中)	七里光平(城山中)
	服部 樹(日比野中)	児玉和優(宮中)	稲垣芳章(若葉中)
	長谷川裕記(宝神中)	赤石怜士(若葉中)	安福洋可(城山中)
	石井 剛(港南中)	見田篤紀(供米田中)	伊藤慎二(神丘中)
	野口哲平(志段味中)	林 明日香(新郊中)	鈴木一馬(御田中)
	福西義朗(桜丘中)	酒井拓也(北陵中)	飯場しおり(東港中)
	馬場雄平(豊国中)	服部和也(神の倉中)	杉本大幸(楠中)
	澤田健佑(南光中)	葉栗宏太(笹島中)	服部宏治(港南中)
白井 柊(前津中)	馬野雄介(菊井中)	水野陽介(日比野中)	
担当事務局員	大塚基央(伊勢山中)	竹村詩子(猪子石中)	西脇 佑(丸の内中)

研修活動

授業づくり講座や、ステップアップ研修全体会など、参加者が学んだことを明日からの授業に生かし、社会科の授業力を高めることができるように日程や内容、方法、時間など、同好会会員のニーズをつかんで、研修活動に取り組んでいきたいと考えています。

社会科同好会 全体会

4月28日(水)、オンライン会議システム「Zoom(ズーム)」を用いて、社会科同好会全体会を行いました。会長の尾本潔彦先生にご講話をいただきました。

＜社会科同好会会長 明倫小学校長 尾本 潔彦 先生＞

教師として社会人として

同好会を通じて様々な大切なことを学びました。

丁寧な挨拶はその一つです。研究や研修で様々な会場をお借りします。その感謝の気持ちも込めてしっかりと挨拶をしたいものです。こうした感謝の気持ちは、会場でお借りする来客用の靴箱のどの位置を利用するかにも表すことができます。おすすめは一番使いにくい場所を使用することです。もちろん自分たちだけが使うものではありません。会場をお借りする感謝の気持ちとともに謙虚な気持ちも表せます。また、ぎりぎりまで校内の仕事をして後から駆け付けて来る仲間のことを思い、使いやすい場所を空けておくという心配りもそこにはあります。



学校は仕事が分担されていて円滑に進んでいるように見えますが、実は様々な隙間がある「隙間産業」です。円滑に進んでいるのは誰かがその隙間を埋めているからです。そうしたことに気付くのは、これまで隙間を埋めていた人が異動して、学校がギクシャクし始めたときです。隙間を感じ取り、埋められる人になってください。自分にゆとりがあると隙間に気付き、埋められる存在になります。ゆとりをつくるのも能力です。ゆとりがつかれないといろいろな仕事を後回しにしがちになります。感情もイライラしがちです。誰とも関わらない仕事はまずありません。遅くなってやっつけ仕事ではミスも多くなり、迷惑をたくさん掛けることになります。段取りよく進めていても突発的なことが生じることもあります。期限をしっかりと決めて計画的に、またゆとりをもって仕事を進めていくことが大切です。時間がないほうが中身が濃く集中して、しっかりと決断をして仕事ができます。今の働き方改革にもつながることだと思います。

子どもから学ぶ

以前、小学校の1・2年生でも社会科の学習がありました。1年生の単元「学校ではたらく人」は、学校生活を支えている先生や職員の仕事の様子に気付かせ、社会の一員としての意識をもつようにすることを目標とした学習でした。その中の小単元「給食調理場ではたらく人」では、たくさんの人の給食を少ない人数で作る調理員さんの仕事の様子を捉えるために給食調理場の見学をしました。その時、大きなしゃもじを子どもたちに持たせてもらいました。ほとんどの子どもは、こちらの意図通りに「わぁ大きい」「重たい」としゃもじの大きさや重さに注目していましたが、ある子どもはその大きなしゃもじに自分の鼻を近づけ、「わぁキャベツの匂いがする」とつぶやきました。調理員さんに尋ねると、さっきまでキャベツをかき交ぜていたとのこと。子どもたちが自分の体全体を使って感じようとする特性をもっていることに気付きました。これをきっかけに、次の学習では教室の中に学校まわりの床地図を作って巨人になって眺めてみたり、交差点を作って歩いてみたり、交通指導員さんになって演じてみたりして、道路の安全施設の働きや安全を守る人々の仕事の様子に気付かせる学習を体全体を使って行いました。子どものすてきな感性を生かした社会科学習を楽しみました。

応援される存在に

職場で応援される存在になってほしいと思います。同好会に出掛ける時に「今日は早いね」「いってらっしゃい」「体に気を付けて」と言われる存在になってほしいと思います。そう言われる人は、校内でも頑張っていて欠かせない存在になっているはずです。「あの人は外のことしかやっていない」と決して言われないようにしてください。社会科で仕事を依頼される人は、信頼されている人、期待されている人です。ぜひ周りから応援される人になってください。

自分の心や体を大切に、家族も大切に良い一年にしてください。



子ども輝く社会科授業

魅力あふれる教材を開発し、子どもが輝く社会科授業。

そのような授業を日々積み重ねておられる会員の先生方の実践を紹介します。



主体的に学びを進めることができる子どもの育成

～個別化・協同化・プロジェクト化した社会科学習～ 稲永小学校 夏目郁馬

「大丈夫じゃないでしょ!」「きっと何か対策しているよ」「どんな対策をしているか調べたい!」今からおよそ60年前、東海地方を襲った伊勢湾台風は稲永学区にも大きな被害をもたらした。校内にも被害を示す記録碑が立てられ、近くにある港防災センターには当時の写真が残されていた。冒頭の言葉は、当時の被害を知った後に「今後、同じような台風が来たら、稲永のまちは大丈夫だと思いますか?」と教師が問い掛けた際の反応である。子どもにとって身近なものを教材化することで、探究心に火を付けることができた。また、ICTを活用した学習環境を整え、学習の個別化を図ったことで、意欲的に追究した。中でもオンライン対話アプリを使い、実社会で防災に力を入れている方々から取材をする活動では、目を輝かせて話を聞いた。そして、取材をする中で知った「今の社会が抱える課題」を解決するために、これまでの学びを生かしながら、仲間と協同してプロジェクトを考えた。それを実社会で働く大人に提案することができたときの表情は、満足感と充実感に満ちていた。子どもは、調べたいことを自分が決めた方法で調べ、学びを実社会で生かすことで、学ぶことのよさや喜びを実感し主体的になっていった。実践を通して、子どもの主体的な学びを促すためには「子どもにとって身近なものを教材化すること」や「実社会で働く方々と対話すること」が、とても重要であることを実感することができた。

歴史学習を通して、社会や仲間と“つながり”をもちながら、

～ビジョンをもって学習し、次に“つなぐ”ことができる生徒の育成～ 沢上中学校 加藤優太

「吉宗、意次、定信の3人の中で総理大臣にふさわしいのは誰か」という学習課題を設定し、「なかまなビジョン」の単元構成を意識しながら、最後の「まとめ」では“つなぐ”活動を盛り込み、次の単元への見通し(ビジョン)がもてるように工夫した。ワークシートも「1枚ポートフォリオ(学習課題について自分の考えを毎時間記録していくもの)」を活用し、自分の考えを整理しながら単元全体の見通しをもてるように工夫した。自分の考えをもたせて討論を行ったり、考えたことをもとに次の単元への流れを予想したりする活動をした。3人の為政者の中で、このコロナ禍のひっ迫する社会状況の中でリーダーにするなら誰かという視点で考えさせた。「強いリーダーシップ」「経済対策」「財政政策」の3点の視点から、時代が違うことを念頭に、リーダーとしてふさわしいかどうかを議論させた。“つなぐ”活動では、江戸幕府が滅亡した理由について予想させることで、学習した知識を生かして次の単元への見通しをもてるようにした。

学習を通して、「自分が将来選挙に行ったらこういう視点で投票したい」とか「社会をよりよくしようという思いは今の政治家と同じ」といった現代の社会につながる視点に気付くことができた。

～今後の予定～

- 6月 4日(金) 19:00～ 授業づくり講座①(Zoom開催)
- 7月 27日(火) 18:30～ 小・中学校部会
- 9月 07日(火) 18:30～ 小・中学校部会
- 9月 15日(水) 19:00～ 授業づくり講座②